



19 高橋清《起原 No.3》1966年 ブロンズ

所蔵美術作品展

かたちを「うつす」世界

— 写す・移す・映す —

2024年 11月16日(土) ▶▶▶ 2025年 1月13日(月・祝)

開館時間 午前9時 — 午後5時

入館料 無料

休館日 月曜日(1月13日を除く)、12月28日(土)～1月3日(金)

この展覧会は、当館所蔵の美術作品を「うつす」をキーワードにした3つの章にそって紹介するものです。

第1章「写す」では、齋藤満栄、西村満、羽田信彌、鶴巻加代の作品により、現実が作家の眼を通して描かれた表現に着目します。ここで紹介する齋藤満栄の2作品では草花が緻密な筆致によって写し取られています。その草花は幽玄な存在感を帯び、人間のような佇まいをしています。現実のままを写した作品でも、作家の眼と画面上に描かれる「かたち」の間の往復によって、その「かたち」は目に見えないものへと近づき、独自の世界が構築されていきます。描かれた「もの」や「こと」は作家固有の作品として語り直され、表現の力を持って私たちの前に現れるでしょう。

第2章「移す」では、かたちを移す素材や技法と、移された「かたち」に着目します。長沢明の物質の特徴を活用した作品や、イメージを移す“転写”の技法を用いた高橋清の版画表現、川嶋宣彦の鑄造というかたちの間接的な造形表現、

本間公司の作品が示す物質を型取りする素材で移された形など、これらの作品には、素材や技法の特徴によって新しい見方が加わっています。素材や技法は造形物を作るのみならず、その特徴への探究が含蓄に富んだ作品を作り出すのです。

これまでの2つの章で作品が多くての観点を持つことを紹介しました。第3章「映す」では、西村満、鈴木香雲の絵画、高橋清の彫刻作品における表現から、私たちの目に幻影(イリュージョン)として映る「かたち」に着目します。私たちが絵画に描かれた図像や彫刻の立体的な形状にさまざまなイメージを見るのは、作品が物質そのものを超えた多様な意味を持つ存在へと深められているからです。作品は造形物の内に作家の手、素材や技法の特徴、鑑賞者の眼など、多様な意味を内包し、鑑賞を通して私たちに「かたち」としての姿を見せています。

3つの章から、鑑賞によって浮かび上がる「かたち」を探り、表現の世界を味わってみてください。



齋藤 満栄 SAITO Mitsuei

■ 1948年、北蒲原郡葛塚町(現新潟市)生まれ



2 《秋草》 1993年 岩絵具、紙

鶏頭は、花穂の赤い色とややグロテスクなかたちが強調され、あたかも意志を持った生き物のように妖艶な雰囲気漂わせています。そしてその生命力は可憐なコスモスをなぎ倒し、生の盛りを誇っています。この《秋草》は、それぞれ単独で写生したモチーフを画面上で組み合わせた創作ですが、そこには徹底的な写実を通して、生の背後に潜む死の深淵を見据えたまなざしがみとれます。齋藤満栄は、このドラマを、現世と隔絶した黄金の世界を背景に展開させています。

鶴巻 加代 TSURUMAKI Kayo

■ 1946年、北蒲原郡京ヶ瀬村(現阿賀野市)生まれ



7 《スケッチ(船大工道具2)》 2003年 鉛筆、ペン、紙

当館所蔵の民俗資料(道具)を描写した8点のスケッチの中の1点です。道具に備わる合理的な形や材質のおもしろさ、そしてそこに内在する機能美への鶴巻加代の強い関心がみとれます。その直感的な遠近のまなざしにより、彼女の作品には、摩耗し変形した道具が物語る人間の労働とその時間、さらには手のぬくもりさえもが、モノクロームの線描だけで生き生きと写し出されています。学術的記録としての写実とは異なる、鶴巻の創造的な静物画といえるでしょう。

西村 満 NISHIMURA Mitsuru

■ 1935年-2022年、中魚沼郡貝野村(現十日町市)生まれ



3 《北の曠野》 1994年 油彩、キャンバス

西村満は、自身の原風景との共鳴を現実の風景の中に求め、精緻な写実を通して内的世界の構築を試みてきました。しかし、急速な社会構造の変化が、自身が拠り所とした現実の風景を消滅させたことにより、西村は記憶の中の情景を再構築する表現への転換をはかりました。そして、作品が表象する世界観も変化していきました。《北の曠野》では、従来の間人不在の風景から、失われた風景への哀惜のなかに人間の営みをいとおしむ、抒情的な語りの表現への変化がみとれます。

羽田 信彌 HADA Shinya

■ 1935年-2010年、北蒲原郡安田町(現阿賀野市)生まれ



9 《暮色》(『野良の叫び』から) 1987年 木版 A.P.

木版画集『野良の叫び』は、木崎村小作争議(1922-1930)における主要な出来事を題材に、“農民の苦悩と闘争の物語”として組み立てたモノクロームの作品28点と、多色刷りの情景描写作品10点で構成されています。《暮色》では、簡潔で意匠的な画面構成によって作られた影絵のような風景が、農民の労苦の痕跡を表しています。鈍い輝きを放つ情念的な茜色の残照が、晩秋の田園風景と対照化され、農民の鬱屈した重苦しさを一層引き立てているようです。

長沢 明 NAGASAWA Akira

■ 1967年、北蒲原郡豊栄町(現新潟市)生まれ



10 《鳥に舟》 1999年 岩絵具、箔、土、和紙、綿布、木

まるで悠久の時を旅したかのように錆びついた巨大な舟は、人類が築いてきた文明の歴史=時間を象徴する存在として、画面のほぼ全体を占めています。この舟に堆積する途方もない時間に対し、小鳥=人間は、自らの存在のはかなさにたじろいでいるかに見えます。この画面には、不変を表象する「金」と、顔料に混ぜた「土」という自然物が有するぬくもりの表現とが共存し、舟の圧倒的な静的世界が、生命を抱え込む暖かな大地に転移しているのが認められます。

川嶋 宣彦 KAWASHIMA Nobuhiko

■ 1945年、北海道函館市生まれ



14 《森の歌》 1973年 アルミニウム鋳造

《森の歌》は、発砲スチロールを削って成形した原型を、アルミニウムの造形に置き換えるという間接的な手法で制作されています。樹木の幹と切り株、枝、樹皮などのさまざまな形が統合されたこの作品では、滑らかな面、そしてそれと対照的な鋭いエッジ、粗々しく細かな面など、発砲スチロールによる変化に富んだ表面が、鈍い光を放つ金属面に移されて、生々しい実在感と幻影との共存がみられます。川嶋宣彦が、函館の自然の中で樹々と対話した記憶から生み出した幻想世界です。

高橋 清 TAKAHASHI Kiyoshi

■ 1925年-1996年、南蒲原郡森町村(現三条市)生まれ



12 《風紋》 1989年 エッチング、アクアチント ed.15/100

彫刻家高橋清は、永遠性を象徴する石という素材を用いて、波、風といった変化し続ける自然現象を、心象と結びつけて可視化する表現にも挑戦しています。《風紋》※はこのシリーズの作品であり、静的で開放的な造形が黒御影石によって実現されています。版画《風紋》は、銅板に転写した彫刻の素描を基に制作されましたが、平面表現ゆえの自由な着想がみられます。高橋は、アクアチントの技法を用いて創出した無数の星が瞬く青い宇宙空間に、「風」の彫刻を浮遊させています。

※《風紋》は、1989年に新潟市庁舎前庭に設置されたモニュメント「希望」を構成する1点。

本間 公司 HONMA Koji

■ 1958年、佐渡郡相川町(現佐渡市)生まれ



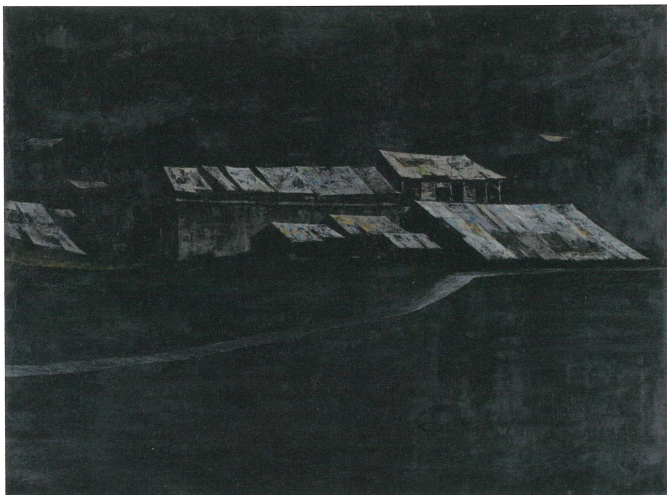
16 《'94表象》 1994年 石膏、アクリル絵具

物質の表面をありのままに写し取る素材である石膏を用いて、地表、砂、ビニールなどのマティエールをそこに「移す」作業は、本間公司が取り組んできた塑像制作における一過程、いわゆる「石膏どり」の応用として発想されました。

本間は、《'94表象》において、石膏で地表の表層を捉え、そこに移された「表面」の様相を提示しています。それとともに、形状を写しとる石膏という素材の性質、そのありようそのものが、作品の主役に押し上げられています。

西村 満 NISHIMURA Mitsuru

■ 1935年-2022年、中魚沼郡貝野村(現十日町市)生まれ



17 《廃坑》 1981年 油彩、キャンバス

岩手県八幡平の松尾鉱山は、明治末期から採掘が行われ、東洋一の硫黄鉱山として繁栄し、1972年には廃山となりました。西村満が取材した1979年当時は、鉱山から流出する鉱毒水の中和処理施設の建設途上でしたが、彼が入念に描き取ったはずの「現実」の光景は、暗闇に沈滞する鉛色の廃墟の群れという幻影に変換されています。私たち人間の「夢」の喪失という重苦しい現実を直截に表現するのではなく、彼一人の寂寥たる「北の風景」として映し出しているのです。

高橋 清 TAKAHASHI Kiyoshi

■ 1925年-1996年、南蒲原郡森町村(現三条市)生まれ

19 《起原No.3》 1966年
ブロンズ

高橋清は、メソアメリカ古代文明の造形に強くひかれ、1958年にメキシコに渡りました。自然(宇宙)への信仰から生み出された神秘的な造形に触発されて同地で制作したこの作品は、原初的な有機的形態を成しています。見る者を作品の内へと誘う花びらのように開いた形は、徐々につぼんで外側に突き抜けています。高橋は石彫家ですが、世界を映し出す光の通路を創出するために、ブロンズ鑄造の技法で制作したのでしょう。起原の形を探求したエロスの象徴的表現です。

作品鑑賞会

2024年 12月1日(日)午後2時～
担当:当館学芸員

2025年 1月5日(日)午後2時～
担当:神田直子(元当館学芸員)

本刊行物の作成にあたり、次の方々からご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。(敬称略)

川嶋宣彦 齋藤満栄 <撮影>
鶴巻加代 長沢明 中澤和広(スタジオユー) 2, 3, 7, 9, 17, 19
本間公司 高橋玲子 岡本豊 10, 14, 16
堤一彦 西村和子 中川伸 18
羽田佐代 増井友和 12

鈴木 香雲 SUZUKI Koun

■ 1900年-1977年、北蒲原郡嘉山村(現新潟市)生まれ



18 《春秋鳥獣図(秋)》 1939年

岩絵具、墨、紙 (六曲一双の左隻)

右隻には、「常緑の松に雉と桜」、左隻(図版)には、「鹿と紅葉」。春秋のモチーフを配した典型的な主題による一双の屏風として構成されています。慣習的な吉祥のシンボルを多用した、慶事に用いられる調度品としての幻想的風景画であり、現実の風景描写ではありません。しかし、詩書画一体の宇宙を探究する南画の修業を積んだ鈴木香雲は、伝統的な画題の枠組みのなかで型を踏襲しつつも、瑞々しい自然の情趣を永遠にとどめる仙境(理想郷)の描出を試みたようです。

■ 出品作品リスト

作家名	作品名	制作年	サイズ	材質、技法等
1 齋藤満栄	重九の節	2005	164.1×209.1	岩絵具、紙
2 齋藤満栄	秋草	1993	173.4×218.5	岩絵具、紙
3 西村 満	北の曠野	1994	97.7×228.0	油彩、キャンバス
4 鶴巻加代	スケッチ(イトグルマ)	2003	12.2×16.8	墨、鉛筆、ペン、紙
5 鶴巻加代	スケッチ(フシンカゴ)	2003	12.2×16.8	鉛筆、ペン、紙
6 鶴巻加代	スケッチ(野良着1)	2003	12.2×16.8	鉛筆、ペン、墨、紙
7 鶴巻加代	スケッチ(船大工道具2)	2003	12.2×16.8	鉛筆、ペン、紙
8 羽田信彌	過酷な搾取 (['野良の叫び']から)	1972	60.0×45.6	木版 A.P.
9 羽田信彌	暮色(['野良の叫び']から)	1987	30.0×45.4	木版 A.P.
10 長沢 明	鳥に舟	1999	162.0×230.0	岩絵具、箔、土、和紙、綿布、木
11 長沢 明	鳥と舟	2001	104.7×91.7	砕かれた本、岩絵具、箔、鉄粉、石膏
12 高橋 清	風紋 (モニュメント「希望」(1989)から)	1989	27.0×18.0	エッチング、アクアチント ed.15/100
13 高橋 清	開かれた宇宙 (「モニュメント「開かれた宇宙」(1990) のためのドローイング	1988	36.0×45.0	リトグラフ ed.40/100
14 川嶋宣彦	森の歌	1973	36.0×54.0×66.0	アルミニウム鑄造
15 川嶋宣彦	穹蒼	1978	100.0×60.0×60.0	アルミニウム鑄造、ステンレススチール
16 本間公司	'94表象	1994	32.6×40.2×91.3	石膏、アクリル絵具
17 西村 満	廃坑	1981	111.0×146.0	油彩、キャンバス
18 鈴木香雲	春秋鳥獣図	1939	149.0×328.0(右隻) 149.0×331.0(左隻)	岩絵具、墨、紙(六曲一双)
19 高橋 清	起原No.3	1966	28.0×18.0×24.3	ブロンズ
20 高橋 清	ひと 1991-1	1991	51.0×39.5×31.8	大理石、黒御影石

所蔵美術作品展

かたちを「うつす」世界 — 写す・移す・映す —

編集・作成: 大森慎子・大野瑞穂(新潟市北区郷土博物館学芸員)
企画・執筆・協力: 遠山裕菜 / 表紙文・神田直子 / pp.2-4 (元当館学芸員)
発行日: 2024年10月29日
主催・発行: 新潟市北区郷土博物館 新潟市北区嘉山3452番地
印刷: 島津印刷株式会社